たまに誰のための打倒なんやろう、って思う。

小西亮 Ryo Konishi

取材・文　藤本遼

日替わり店長のお店

週間マガリ

「ヘンな出会いが、きっとある」。「週間マガリ（以下：マガリ）」のホームページを訪ねると、最初に目に入ってくるコピーだ。その言葉の通り、日替わり店主が自分の好きな場を開くことのできるバーとして、これまでさまざまなヘンな出会いを生んできた。それはある種のドラマのようでもある。しかし「マガリ」はイベントスペースではない。「マガリ」では、知り合いを呼んで貸し切りでイベントを開催するのではなく、誰でも参加できる場にするというのがポイントになっている。それが想像もしなかった出会いにつながっていくのであろう。地下鉄南森町駅から南に徒歩少し、天神橋筋商店街のアーケードが切れた先。少し入りづらいビルの2階にその空間はある。ヘンな出会いを数多生んできたその店内で、店主の小西亮さんに話を聞いた。

——最近、なにしてるの？

「マガリ」とは別に本屋をしようと思っていたけど、5日でつぶれたよ（笑）。それからは地に足をつけて活動してる。ちゃんと（笑）。

——早い（笑）。本屋はどこに？

中崎町から徒歩15分くらい。本庄というところにあって。商用物件の10LDK。借りてから気づいたのがボロボロすぎたということ（笑）。改装不可能だったね。片付けはたくさんやっていたんだけど、物件が汚すぎた。「マガリ」のお客さんと掃除をしてもなぜか次の日に見ると汚くなっているという（笑）。築70年くらいかな。本屋にチャレンジする前は週3くらいで休んでいたけど、これからは「マガリ」を休まずフル営業していこうと思ってる。

——もう本屋はやらないの？

もうやらない（笑）。構想を練っていたけど、自分にはしんどすぎて。それに2店舗も経営できないことに気づいた。本に関する企画は「マガリ」で実現しようと思っている。今「マガリ」にもドヤ顔でたくさんの本を置いているけど、そのうち7割は読んだことがないから説明ができない（笑）。でもこれからも本にまつわることはやりたいなと。

——「マガリ」にある本はお客さんが持ってくるの？

全部自分で買ってる。シェア本屋とかは嫌いで。内容というよりもジャケ買いをして

いて。エッジの効いた本屋で選んでるね。そこで面白そうな本を適当に見繕って。今年の目標は買った本をちゃんと読むことかな。

――本屋をやろうと思ったタイミングっていつ？

言い出したのは、2018年の夏ごろ。もともと本でなにかやりたいというのはあったんやけど。そのときはいろいろとトークイベントなんかにも呼ばれていて。そういえば編集者の箕輪厚介さんと対談させてもらったな。スベったけど（笑）。

――スベったんや（笑）。

300人くらいのキャパシティでトークイベントをして。場所は味園ユニバース。めっちゃスベった。箕輪さんと会ったことがなかったので、運営側がちゃんと進行してくれると思ってたら、誰もいなくて2人で話した（笑）。箕輪さんも気を遣ってくれてほんまに地獄みたいやった。去年のダイジェストやな。スベり倒しの2018年。高校でもスベったし。

――そんなにスベってるんや（笑）。

全校生徒向けの講演を頼まれてね。ある進学校で。自分で考えて動いていくことで、道は切り開いていけるというような趣旨の講演。こんな自分に声かけてくれるなんて先生もどうかしてるわ。いや、素晴らしい人やと思うけど。

――先見の明があるというか（笑）。

そうやで、ほんま。生徒さんはしっかりしていてよかったんやけど、300人中2人だけ遅刻して来た人がいて。それだけで体育教師が竹刀を振り回して、空気が悪くなったんよね。いやほんま、今から話すのにいい空気つくってくれよと。めちゃくちゃ場の空気も悪くなったわ。生徒への叱り方もテンプレートな感じがしてどうかなと思ったし。自分が先生ならその体育教師を怒ってると思うわ（笑）。

――まあまあ（笑）。

講演では、自分自身はどういう風に大学を選んで、どうして自営業をしているのかっていう話をしたんやけど、全然やったな。1時間の講演でウケ狙いの部分を50発くらい仕込んでいったんやけど、全部スベった（笑）。「ネタはスベってたけど、流されず自分の頭で考えることが重要だと勉強になった」と事後のアンケートではぼちぼち好評やってんけどね。

――今年は講演の依頼はないの？

一つもかかってない（笑）。去年あれだけテレビとか来たのに。人様の前で話をするのはどうも性に合わへん。これからは地に足つけて活動をやっていこうと思う。

――「マガリ」はメインに行かない感じがいいよね。

本当はメインに行きたい。音楽で言うとミスチルを目指してる（笑）。でもどうしてもインディーズシーンから出られない感があって。

――うん（笑）？

まあミスチルの話はネタとして、ぼくが思うに、場づくりやコミュニティ好き界隈の「メイン」って意識が高くて、かつ閉鎖的なイメージがあるんよ。一部の人のものになっているというか。そうではなくて「マガリ」はむしろコミュニティ好き界隈以外の人たちにもリーチしていきたいと思っていて。

――なるほどね。

最近、開かれているようで全く開かれていない場所が多いなと思ってる。サブカルの匂いがするんよね。一部の人だけで盛り上がっている感じというか。オルタナティブスペースっていう言い方とかもあるけど。

――オルタナティブスペース？

イベントスペースとは違う。なにをやっているかよくわからない場所。かなりクローズドなスペース。ぼくの中での認識はね。サブカルが好きな人にとっては魅力的だけど、普通の人は行かない。一部の意識高い系の人たちが行くスペースって面白いんやけど、すごく内輪ノリ。どこまで開くのかっていうところは難しい。開きすぎたらただの店になってしまう。

――開き方と閉じ方。

結構意識していて。オルタナティブスペースとカフェの真ん中ってなんだ、ということをずっと考えてやってきた。でもこれは極めて難しい。そこを狙っている。ウチはいい具合には閉じられているかなと思っていて。

――一定のフィルターはあるが、入れない空気感ではないと。

そうやね。でもパンケーキ大好きな女の子がマガリに来たら、そっちもこっちも怪我する（笑）。難しいよね。

――同業者（場所を持っている人や店舗経営者）とそんな話はしない？

自分としてはあまり同業者がいないって感覚かな。こんな感じのスペースって閉じすぎていることが多いと思っていて。開いているって言ってるけど開いていないみたいな。なので、話す人があんまりいないって感じ。

――「マガリ」はメインではないけど、めちゃくちゃサブでもない。閉じているわけでもないし、開いているわけでもない。その隙間を狙おうとしているのは、どのような背景があるんやろう。

自分は病的に内輪ノリが嫌いで。仲間内で飲むのも、サブカルチャーもどっちも内輪ノリ。そういうのが嫌いなんよね。

――なんで嫌いなんやろう。

学生の頃からスクールカースト自体に関心がなくて。小学校とか中学校時代の内輪ノリに嫌気がさしていた。オタクもヤンキーもどっちもうざいみたいな（笑）。それは他人の内輪ノリは嫌いなくせに自分たちは内輪ノリというパラドックスに対しての違和感というか。そうやってオタ

クもヤンキーも普通の学生もそれぞれで群れをなしてることに疑問がある。あくまでぼくの考えやけどね。

——なるほど。

どうして他のクラスタや層と関わらず、排他的でいられるのかに気持ち悪さを感じることが多くて。自分自身は高校の時はあまり目立たない部類の人間やって。でも全校生徒と話そうという企画がスタートして。自分の中で勝手に（笑）。

——勝手にやってたんや（笑）。

大学時代もたくさんのサークルに所属してた。70個くらい（笑）。なんの役にも立たんから就活はすごく落ちた（笑）。就活をやめて5回生の時にオルタナティブスペースとかイベントスペースにめちゃくちゃ行ったんよね。でもそこも内輪ノリだった。人とのつながりとか絆に感謝とか言っているのに、店主と客がずっとしゃべっていて内輪ノリだった。なんかそれが気持ち悪かったんよね。

——どういうことなんやろう。

サークルも、学生団体も、組織も、コミュニティスペースも、全部内輪ノリやって。どうしたらいいんやろうって思ってた。そんな時に中崎町にある日替わり店長の店「コモンカフェ」に出会って。これは面白いって。これやったら、他の日の店長を見たいなという気持ちで、何回も人が来るんじゃないかと思ってね。関わりが広がっていくというか。そういう意味で言うと、「マガリ」は場所を持っている中ではぶっちぎりでいろんな人が来ているなと感じている。

——店のはじまりってどんなところから？

この店は、怒りとかストレスからはじまっている店な気がしていて。他のスペースと動機が違うかもしれないなって。他のスペースはポジティブな想いからスタートしているように思うけど、自分は怒りからはじまっているなと。

——その怒りってまだあるの？

ある。もちろん、楽しいという気持ちもあるけどね。でも打倒内輪ノリ。打倒コミュニティとか言っちゃうんよね（笑）。そもそも「マガリ」はコミュニティではなくて、さまざまなコミュニティを混ぜたり架け橋をつくったりする「ハブ」を目指していて。だからそもそもサークルやコミュニティごとの飲み会などは予約の段階で禁止しているんよね。もちろん店長と常連が仲良くしているのは否定しないけど、うちではそんなのは二の次。だってそんなの居酒屋やほかのレンタルスペースでいくらでもできるから。

——そこにこだわりがあるんやね。

これはどっちがいいとか悪いとかの話ではなくて。閉じたコミュニティや場づくりなんて、ほかのもっと優れた人がすでにやっているのだからわざわざ自分がやる必要がないと思っていて。ぼくが気になっているのは、多くの人がどこかに存在する何百何千と

ある見たことのない世界を知らないことで。それをもったいないと思ってしまうので「マガリ」でちょい見せしている。ちなみに僕が内輪ノリをここまで嫌うのは、自分たち以外を認めないというコミュニティの排他性や陰湿性なんだよね。

――コミュニティや層を超えて関わり合うことが重要だと。

内輪では新しい発見がしづらいから。あとは排他的になっていくと、どこかでこぼれていく人が生まれるというか。まあそこまで深くは考えていないけどね。それでも全然そういったことを考えていない人に対してはキツく言っちゃうよね（笑）。

――正義のヒーローなのかなんなのか（笑）。

そうやって世直ししていくことは、ある意味でライフワーク。たまにやりすぎてしまって、なんでそこまでやってしまったんやろうって思うこともあるけど（笑）。

――活を入れた時にどんな反応が？

空気を読めない人はジョークが通じない。ジョークを言ったらめちゃくちゃキレるし（笑）。来ている他のお客さんに怒られたり注意されたりして、人は成長していく部分もあると思っていて。マガリは頭を打つ場でもあると思う。だから承認ばっかりしていたらダメだと思ってる。

――ははは。

ＮＨＫの番組を見て来る人もいたんやけど。キラキラ系の人というか。場づくりしたいです、みたいな。そこも若い芽を枯らしたよね（笑）。さまざまなコミュニティが世の中にはあって、その境界線は案外超えられるというコンセプトをうまく理解してもらえなくって。

――でもマガリも閉じてしまう部分はあるよね。

そうやね。意識高い系と言われる人も主婦層も来る。でも業界とか分野のアウトローの人しか来ないよね。いわゆる一般の層というのかな、そこが来ない。まあ一般の人が来たら来たで、自分が対応できないんやけど（笑）。普通に自分たちの時間を楽しみたい人たちは３人とか４人で来ることが多くて。基本的にソファに座って仲間たちとずっと上司の悪口や愚痴を言っていて。偏見かもしれないけど（笑）。彼らが話しているその空間と「マガリ」に一人で来てみんなと交流しようとしている人たちのパラレルワールドが発生するときがあるんよ（笑）。でも彼ら同士は全然相容れることがなくて。その時に哀愁が漂うよね。やっぱり混ぜることって無理なんかなって。

――でもパラレルワールドが発生しているっていうのが面白いよね（笑）。

確かにそこまで行っていない場所がほとんどだよね。

――つなげたいとかいろんな人が来てほしいとか言ってい

る場所は多いけど、すべての人が来る場は難しいよね。マガリでは、それぞれの店長がつくっている場をごちゃっと混ぜるようなタイミングはあるの？

今はあまりないんやけど、それをやらないとあかんってのを6年目にして気づいた（笑）。どこかイベントスペース化していて、そのイベントの対象に合っている人しか来ないのはあるよね。他の店主じゃなくて、自分だけで回している通常営業も内輪ノリになってしまう。でもまあ思うんやけど、内輪ノリ好きとか仲の良い人たちと関わりたいっていうニーズの方が圧倒的に多いのに、自分はそれを否定するというか。混ぜたくなる。もはや、誰に向けてやっているのかわからない（笑）。

――面白い（笑）。そういう意味でいうと、恋人いないいないバーって普段来ている人同士をつなげる機会だったのではと思うんだけど、どんな企画だった？

そうやね。恋人がいないということをあえて楽しむイベントで。イケメンが壁ドンしたり、マッチョがお姫様抱っこしたり。恋愛というテーマは一般性があると思っていて。普段マガリに来ないような人が来てくれると思ってたけど、薄まっちゃった感があるな。たくさんの人を相手できないし、うまくつなげられない。600人とか700人くらい来てくれたので。楽しかったけど、なにも残らずに終わってしまった感がある。フェスは薄まるなって。自分はあんまり好きじゃないかな。

――マガリの開店はいつだっけ？

2013年末。今5年ちょっとかな。大学は2013年卒で。在学中からお店ってできると思っていて。相方がいて2人ではじめたんやけど。彼は3ヶ月しかおらんかった。30万くらいあったらお店ができると思ってたんやけど、30万で店はできないと気がついた（笑）。やばい、就職しようって思って。中崎町にあった広告代理店に入った。毎日中崎町にランチ行けると思ってそこにして（笑）。2ヶ月でやめた。バイト感覚ではダメやと思ったね（笑）。扇町公園で上司に土下座してやめた。当時はお金がなかったんよ。最低でも100万くらいは必要やと思って、プールで監視員とかをして稼いだな。それで2013年の10月くらいに物件を見つけて。内装には1ヶ月くらいかかったかな。

――すぐ店は見つかったの？

不動産屋に紹介してもらって。広さが欲しかったんよね。元々は鍋屋の居抜きで畳しかなかった。最初は大阪市の北区でやりたいと思ってたけどなかなかなくて。

――家賃はいくら？

家賃は12万。大阪市北区でこの大きさだったら2倍くらいかかる。

――最初はサークルの友人とかに使ってもらっていたんだよね。

大学時代は70くらいサークルに入っていったので、友達はできなかったが無駄に顔が広くなっていた（笑）。当時mixiの時代だったけど、その頃からFacebookの友達が1千人いて。でもつながっているだけだったら意味がないなって。その1千人の人たちとなんか一緒に面白いことができればと思って出てきたのが、この日替わり店長だった。だから集客には苦労しなかった。そこが唯一の強みだったかな。薄い付き合いだからこそできるというか。

——なるほど。お客さんの傾向とかってあるの？

全員が話せるテーマのときは参加の射程が広がるよね。店長が主導権を握らずに参加者が主体的に関われるイベントとか、みんなが話すネタを持っているテーマとかは人が集まるし、多様性がある。固有名詞を使うイベントはなかなか人が来ないね。

——今までで一番印象的なイベントや人は？

ほぼ毎日やっていて、今まで2千回くらいやっているから（笑）。特別なにかということはない。特別感を求めてないかな。最近は「こち亀」を目指していて。一発のでかいイベントよりも毎日面白いみたいな感じにしたいと思っているので、いい意味でそういうのはない。店長の知り合いも来るし、自分の知り合いも来るし、ネットで見て来る人もいる。一人で来ているのに、そこが出会ってみんなで話しているのを見ると、新しいつながりが生まれていると感じてうれしい。それはずっとそうやね。逆にこの店で内輪ノリをしているのは辛い。この6年間なにしてたんやろうと思ってしまう。

——やっぱり人のつながりができるのは面白い？

ここはフロント。仲良しグループではない。窓口やなって。ここでコミュニティをつくるという意識はなくて。ここで出会ってその後はどっかでやってってなる。ずっと来ていたら心配になる。

——でもずっと来る人もいるよね？

そうやね。でもそういう人たちは中の仕事を手伝ってくれていたり、ファシリテーター的な動き方をしてくれたりしている。

——新しく一人で来てくれている人にはどう関わる？

そういう人たちをとても大事にしている。一人で来ている人に対しては特に楽しんでもらおうと思うよね。2回目以降の人はうまい具合に適当にしながら他の人たちと混ぜようと思う。仲間意識が強いと排他性が生まれるから。仲間意識というものに対してみんなはなんで偏屈にならないんやろうって逆に

心配になるよね。

――多様性を大切にしている？

そういうわけでもない。分野の違う人たちがつながることはおもしろいんやけどね。

――関わるのが難しい人とかも来る？

かまってちゃんみたいな人が来ることがある。コーラ1杯で4時間粘って、そこにいつづけて、自分の自意識を満たすというか。

――と言うと？

これはあくまで一例なんやけど、コミュニティスペースに依存する人は与えることができてない人が多いなと思っていて。コーラ一杯で開店から閉店までいるわりに、相手の都合おかまいなしで連絡先を聞きまわったり、このお店では常連なんだと言って他のお客さんにマウントをとったりと、自意識を満たしているだけで店側にも他のお客さんにもメリットがあまりないというか。そもそも、うちは場づくり以前に飲食店であり社交場やからね。店の利益も当然出していかないといけない。「マガリ」だからなんでもありなわけではなく、一般社会でのたしなみを勉強する酒場でもある。

――なるほど。教育的な側面もあると。

さまざまなスペースやイベントに参加してはSNSの友達を増やしてるだけの人たちが結構たくさんいる。その界隈の人たちの中では当たり前の常識でも、そういった距離感で接したらまともな学生や社会人にはとことん嫌われるよと（笑）。結局、なにをつくりたいかって、閉ざされた世界ではなく、さまざまな背景をもった人たちが集まり混ざるハブで。その中で、自分たちの常識を押しつけずに歩み寄れる社交場をつくりたいんよね。普段は会社と家の往復だけで、みたいな人がほかにも多様な人がいるということを知ることのできる場にしたい。ポジティブな意味で居場所を探している人に場所を提供したいと思っている。

――でもグレーゾーンって結構あると思ってるんだけど。どこまで受け止めるかというか。その点はどう思う？

それぞれに収まるところがあるというのが最近の回答で。合わない人がいたらほかの店を紹介する。ある時、自分と年齢が一緒くらいのお客さんが来て。みんながそれぞれでしゃべっているのに、真顔で全員に乾杯をしていく人。みんなにやっていたから放っておくと他の人に迷惑がかかると思って。でも混ぜてあげたいとも思ってたんだよね。

――うん。

だから、乾杯おじさんだねってイジっていたんよ。そしたら彼の目が潤んできて「ぼくのこと、嫌いなんですよね」と言い出して。結果的に傷つけてしまったんよね。後日SNSに人生に一番悲しい日だったと投稿されていて。これはさすがの自分も反省した。でも結果的にこの店には合わないと言ったんよね。別の場所を探してくださいって。悪意があってもなくても不適切だと判断したことについては言わないとね。あなたをもてなすためにやってるわけじゃないって。でも色んな人が来てくれること自体はいい。

——理想的な瞬間って今まであった？

お坊さんとギャルが話しているとか面白いやん。そういうのとか。あとはこの前、胡散臭い人がいて（笑）。アラブでアニメフェスすると言っているお客さんがいたのね。そのことをネタで投稿したんよ。「石油王と仲良くなりたい人は小西まで」みたいな。そうすると一人関心を持ってくれて。それでつないでみたらほんまに石油王やったっていう（笑）。意図せずにつないでしまった。

——バグを起こすみたいなことなんかな。

そうそう。なにが起こるかわからないっていうのがいいよね。パラレルワールドの特異点が理想。予定調和じゃないことが起こることが面白いのかも。イベントに行ったらまたこの人かみたいなことってあるやん。大阪めっちゃ広いのにまたこの人おるやんみたいな。そういう場づくりおじさんの「スタンプラリー」にはなりたくないなって。

——お客さんとはどんな関わりなの？

年末に常連さんが集まって小西大反省会を行った。びっくりするぐらいボロクソ言われた。一番多かったのが、対個人のコミュニケーション能力が低すぎるということで。全体をつなげることはできているけど、個人の話を引き出す能力がないと言われた。人を表面的にしか見ていなかった。

——小西くんは深くつながることを求めてないよね（笑）。

そうなんだけど。でもつなぐためには個人のことを知っている必要があって。それを引き出してから全体を盛り上げてもいいのではないかと言われた。人のキャラクターやアイコンだけでもの言い過ぎだし、爆笑する時白目むきすぎだし。去年の年末にすごく反省していた。もっと人の可能性を見ていこうって（笑）。

名前 **小西 亮**
生年月日 **1988年12月6日**
職業 **1000人の夜喫茶**
「週間マガリ」しがない管理人

昭和と平成の狭間生まれ、大阪府出身。「君には他にないキモさがある。」と謎の採用理由で広告代理店に就職するも2ヶ月で脱サラ。「似たり寄ったりな人が集まる場所は多けれど、ちがう村や知らないジャンルを覗ける場所は案外ない。」と24歳のときに日替わり店長のカフェバー「週間マガリ」を立ち上げる。ほかにも、2,000人動員のソロ充フェス「恋人イナイイナイバー」、本の惑星「Urusei Honya」、天神橋ルームシェア「めぞん一服」など、得体の知れない活動に精を出す、意識低い系ゆとり起業家。

喫茶ミラクル

Spotted Member

宮原翔太郎

取材・文　藤本遼

鳥取市内から電車で20分ほど。浜村駅から徒歩数分。駅を降りてすぐにある観光センターの角を東に折れ、いくつかの旅館を眺めた後「喫茶ミラクル」が突然姿を現す。理容店とスナックを改装したその拠点は、過去の雰囲気を感じさせつつも、端材などを使っておしゃれに設えられている。表のガラスに書かれているのは今月の予定表。いくつかのイベントが開催され、人が集っている様子がうかがえる。店内にはキッチンとカウンター、そしてテーブルがいくつかあり、ランチなども食べられるようだ。近所の人がつくっているらしい。「喫茶ミラクル」をつくったのは「パーリー建築」という活動をしていた宮原翔太郎さん。数名のメンバーとともにつくり、そこを拠点に地域や鳥取外の人たちとの関わりを生み出している。今回は宮原さんに「パーリー建築」と「喫茶ミラクル」のことを伺った。

生存していくために、人に集まってもらってるのかも。

——最近、まちとの関わりも増えている感じがするね。

この前、バルイベントを開催した。近くにあるベッドタウンの若者は浜村まで来ないし、自分たちのような若者がいることを知らないので、来てもらうきっかけになればと思って。近所の旅館の人たちと一緒にやった。そしたらスナックのママがめっちゃ喜んでくれて。知らない人もたくさん来たので、良かったなと。はじまったきっかけは「曇天野外」という屋外ライブのイベントの際に旅館のみなさんにお世話になったこと。そこで関係性ができてアイデアの提供という形で関わらせてもらった。

——これまでの経歴について改めて教えてください。

成城大学文学部を卒業した後に専門学校の桑沢デザイン研究所に2年通った。関係ないけど、成城大学にはえなりかずきさんがいたよ（笑）。その後、尾道に行った。

——いきなり尾道（笑）。

大阪に彼女がいたのよ。だから最初は大阪付近で就活しようと思ってて。でも広島にも知り合いがいたから、ゲストハウスづくりに参加しようと思って尾道に行った。ヤドカーリという拠点をつくる途中でね。

——そうやったんやね。

尾道に住んでいる人たちのコミュニティに対する考え方が好きだった。そのマインドを持ちながら生きていけたら楽しいだろうなと思って。気づいたら就活を忘れていた（笑）。

——なるほど（笑）。

そこでやっていたのが、その後の活動のコアな部分になっている。「パーリー建築」的なものだったね。みんなでご飯を食べながら場所をつくっていくという。場所づくりとコミュニティづくりを同時にやっていくような手法で。

——それがマッチしたんや。

DIY精神がみたいなものが生活の中に宿っているまちだった。みんなでつくろうとか、自分でつくろうとか。それでいてイケてる感じで。尾道の空き家再生プロジェクトも素晴らしい活動だよね。自分の行っていた学校の先生を見ていてもあまりピンときていなかったので、どういう考えをベースに建築を続けていけるのかという問いは常にあったね。

——ヤドカーリの改装に関わっているときに印象的なことは？

よこしさんというとても思想的な人がいて。フリーゲストハウスと言って、お金のない人を無料で泊めていたり、食べ物とエネルギーにもかなり気を使っていて、ガスを使った量をメモしていたり。あと米は食わないよね。かつ1日1食。めっちゃハードコアなんよ。一人でボロボロの家をジャッキアップして直すこともあって。彼の基本的な考え方としては、家や土地は誰のものでもないから開放したらいいじゃんってこと。自分はこの考えに影響を受けたね。その人に会ってから朝ごはんを食べなくなったし（笑）。でも実はそっちの方が調子がいいなということに気づいた。

——え？実践してたの（笑）？

細かい固定観念にとらわれないことが重要だなと。いろいろな気づきがあった。家も住まわせてもらったり。家は資産ではないということを気づかされたね。

——尾道には何歳のときに？

23歳のときかな。

——いつまでいたの？

卒業してできるところまでやった半年だけ。濃い半年。

——半年だけなんや。その後は東京に戻るの？

尾道で得た発想をもとに建物を改修させてくれる人がいないか探していたら、東京で

活動をさせてくれそうな人が見つかって。渋谷にその家があったので、ロゴなどをつくってパーリー建築として自分でも活動を発信しようと思って。

——そのときは一人で？

最初は一人でやってたね。施主さんがいたので、その人が他にも声をかけて集まっていた人がいたけどね。自分としてはどこまでできるのかという実験的な意味合いがあったので、お金はもらわずにやっていた。

——その場所はどうなったの？

半年くらいかけてやった。今思うと長いよね。片付けから全部やった。1階は生活空間で、2階はアパート。2階は2部屋だったが、全て自分で改装したね。結局民泊になった。すべて思い通りにはならなかったけど、自分なりにいい感じの内装にはできたかなと。

——よかった。

直しながらスペースをギャラリーとして貸し出していた。展示する人がいたのね。それで展示をする代わりにパーティーをやってねということで自分は食いつないでいた。

——え（笑）？

お金なんてなくてもいいなと思うようになったよね。強くなった。それが大きいなと思う。半年の間に本当にいろんな人たちがイベントや展示をしてくれて。本当にたまにバイトをしていたけど、基本的にはパーティーの時の差し入れだけで食っていた。あとはカンパボックスを置いたり。小銭を握りしめてピーナッツを買いに行ってたな。ナッツは栄養価が高いし眠くならないのよ。よこしさんに教えてもらって（笑）。

——すごいね。改装自体もいろんな人に関わってもらってやるの？

みんな改装しに来るというか、飲みに来ていた。パーティーは期間中ほぼ毎日やっていたから。一緒に作業してくれる人はそこまで多くなかったかな。帰れなくなって寝ていくことになってしまったら翌朝に作業させる。酔わせて眠らせて朝作業させるっていう（笑）。

——その次はどこで活動を？

京都で民泊をつくった。同じような形式でやったが、もっと一緒に作業してくれる人がいた。期間も決まっていたので。

——いきなり京都に。どうして人が集まった？

東京の時にこれから一緒に活動をしようかとなっていた人がいた。マミくんとゆうたろうって言うんだけど。パーリー建築としてメンバーが増えていた。マミくんは元々高校の同級生で、ゆうたろうは前の物件（東京）に遊びに来ていた。その3人で京都に行って。3つの場所を直した。いろんな人に関わってもらい

ながら1ヶ月ちょっとくらいで。その後、転々として鳥取にたどり着くんだよね。

——人が集まることについて思っていることは？

渋谷で最初にやった時から生存戦略としてやっていると思っていて。嗅覚だよね。積極的にいろんな人と関わるようにしている。そうすると差し入れがもらえる。食べ物をもらったり生活に必要なものをもらったり。買い物をせずに生きていられるんだよね。

——生存戦略として場づくりを説明する人は少ないね（笑）。

今、初めて気づいた。これから場づくりを生存戦略として説明していくよ（笑）。

——生存戦略というところとつながったのはなんでなんだろう。

自分もそれが不思議でならない。幼少期は香港に住んでいたんだよね。5歳から14歳くらいまでかな。中3ではじめて日本の学校に来たのよ。香港は経済特区と言われるところで暮らしていて。日本人学校に行っていたんだけど、すごくエリートの子どもたちばかり。そういう意味では土とか手作業とは遠い生活をしていた。反動な気がするな。

——日本に来て感じたことはあった？

給食をはじめて中3で食べたんだよね。すごい国だなと思ったよ。あと、大学の頃に自転車で旅するのは好きだった。バックパックで。日本のローカルを初めて体感した。いろんな人が助けてくれることに感動した。そこから日本の田舎に関心を持ったね。1ヶ月間くらいでぐるっとめぐるみたいなことを大学の頃何度かしたな。地域のじいちゃんばあちゃんなどに会って色々話したよ。実際に住めるな、住みたいなと思った。

——鳥取にはいつ来たの？

2016年の2月くらい。鳥取市内にあったホンバコというブックカフェでトークイベントをして。そこで浜村温泉の建築関係のおじさんと知り合ったんだよね。面白い人で。その人に誘われて2017年に鳥取市に拠点を移すことになった。

——それまでは転々と移動し続けていたけど、自分の拠点を持つということについてどう思っていた？

旅をすることがメインではないなとは思っていて。もともとは一ヶ所でやりたいと思っていた。建築は土地を良く知っている人がやるべきだと考えていたから。そういう建築ができるようになりたいと思ってはじめたんだよね、もともとは。自分の知らないどこかに住宅を設計するというのはやりたくないという思いはあった。だけど一方で、旅をしていることへのジレンマもあった。その地域に一定期間住みながらやってい

ると、どんどん面白いことが起こってくるし友達も増えてくる。だからもっと関わり続けると、連鎖的になにかが起こっていくだろうなとは思っていた。だけどずっとは住めなかったから。でもそしたら結局また空き家になっちゃうんじゃないかって思って。それが嫌だなと思った。

——難しいところだよね。

パーリー建築があるから人が集まる、ということにジレンマを持っていた。結局プレイヤーが出てこないと意味がなくて。でもそこまでできないんだよね。中途半端だった。

——拠点を構えることは望ましかったんだね。

そうそう。そういう時期だと思っていたので、ちょうどよかった。

——喫茶ミラクルをつくったのはいつくらい？

2017年2月ごろに鳥取市に来て、最初は温泉を掘っていた（笑）。温泉というか風呂なんだけど。で、2017年5月くらいからミラクルの改装をはじめて。元々は理容室とスナック。隣り合っていたところをぶち抜いてつくったんだよね。

——期間はどれくらい？

2ヶ月弱くらいでつくったね。2017年の夏くらいにオープンした。

——場所をつくってからの変化は？

面白いんだけど、野生の感覚は弱まっていく気がするんだよね（笑）。ずっと同じ景色で自分の部屋もある。こないだ満月の日に気づいたんだけど。今まで満月の日は興奮して運転できないくらいの感覚だった。だけど今はそこまでいかなくなった。農耕民族というか、定住民族になっちゃったというか。だからやっぱり思ったのは、移住しながら定住していきたいということ。そのバランスは難しいね。生きている間、ずっと課題になりそう。

——なるほど。

定住すると基本的にはいいことが多いと思っているけどね。自分自身の立ち位置もゲストからホストに変わっていった。今はミラクルに居候みたいな子がいるんだけど、現場で改修を一緒にしていて。自分が尾道で受けた衝撃を与えられる場所や時間ができたらなって思っている。

——それはいい関わりやね。

循環している感じがある。でもやっぱり人間関係が面倒な部分ある。今まで場所を移すこともあってこざっぱりと別れられていた。だけど、しっかりと向き合わないといけないこともたくさんあるな。

——お金や人間関係などいろんなバランス感覚を持ちながら生きていかないといけないと思っていて。これからの仕事はどう考えている？

お金を持っている人からはもらう（笑）。あとは、相手の方が面白いんだったらお金を払わなくていいと思ってし

まう。自分の時間の方が貴重だなと思ったらお金をもらうって感じだね。自分のものさしが今はある。自分をわりと相対的に考えているかな。

——お金と価値の話はこれからしていかないといけないと思う。

本質的な価値が生まれればいいよね。最近、DIYがかなり流行ってきていて。そのおかげで仕事になる部分もある。

——薄いものにはならないようにしないとね。

そうだね。でも同時に本質的な価値かどうかはわからないけど、価値になっている部分もあるんだろうなとは思う。この一般化された後にどうするかがポイントかなって思ってる。以前と比べれば状況はよくなっていると思う。

——次のチャレンジ、あるいは今の課題ってどんなの？

引き続き浜村温泉に関わりたいなと思っている。ずっと住んでいたら新しい不動産業的なことができそう。空き家をもらって直してそこに住んでもらう。こんな素敵なところがあるっていうのを面白い活動をしている人に紹介できればなって。自分たちのまちがどんどん面白くなっていけばいいな。

——いいね。

個人的には最近パーティー疲れしてきた（笑）。喫茶店と家が一緒だからね。うまいこと分散させていきたいね。

本当にパーティーしないといけないときにできなくなるといけないと思っているから。自分で場を持っている人に共通する点かもね。

——実際の運営はどんな感じ？

水から土曜日まで開けていて。今お店をやってくれている女の子がいて、その子とも一緒に住んでいる。水曜日は精神障害者の方の居場所をつくろうという団体が使ってくれていて。基本的なオープン時間は11時から17時まで。夜にイベントがあることもある。

——改装の資金はどれくらいかかった？

80万円くらいかな。自分たちでほとんどつくったので材料代だけ。

——今は一日でどれくらい人が来る？

結構まちまちだけど、3、4人くらい。ほとんど常連さんだけど、たまに新規の人が来るって感じかな。だから店ではなく住み開きって感じだね（笑）。お客さんという役割でないと来れない人もいるから。近所のおっちゃんやおばちゃんは金額が決まっている方がわかりやすいって。行きやすいって言ってくれる。寄付は難しいよね。決まっていないと自分も困るなって思うし。ビジネスとしてはこの場所は全然成り立っていない。だからそこを起点にしてなにができるのか試してみたいって思うよね。

——少しずつ広がっているみたいでいいね。

そうだね。あと最近は、パーリー建築という概念を消そうと思っていて（笑）。これはまた話すよ。

名前 **宮原 翔太郎**
生年月日 **1990年3月27日**
職業 **喫茶ミラクルバイトリーダー**

リノベーション業界に旋風を巻き起こしたパーリー建築という建築手法を携えて全国行脚したのち、鳥取の浜村温泉に定住。温泉街なのに日帰り入浴できる施設がないことに絶望することなく、若者が愉快に暮らすことのできる環境づくりをしている。2018年には山陰特有の曇りを楽しむ音楽フェス「曇天野外」を開催。現在、県内有数の妖精の巣窟「喫茶ミラクル」のバイトリーダーを務める。

つくば駅前コワーキングスペース

up Tsukuba

Kyohei Horishita 堀下恭平　Jyuri Emoto 江本珠理

取材・文　藤本遼

2018年にオープンしたコワーキングスペース「up Tsukuba」は、つくばセンター広場内にある。まだ改装途中のような外観が愛着を感じさせる。「駅から近いんだけど、結構迷う方も多くて（笑）」。取材当日、迎えにきてくれた堀下恭平さんがそう話してくれる。元々、堀下さんは筑波大学の近くで「Tsukuba Place Lab」というスペースを運営していた（現在も運営している）。なので、この「up Tsukuba」は彼にとって、2拠点目となる場所だ。「up Tsukuba」の運営に関わっているのは、堀下恭平さんのほかに、江本珠理さんがいる。お二人は2018年に「for here」という合同会社を立ち上げ、この「up Tsukuba」を中心として、地域づくりや組織づくりに関するさまざまな事業に取り組んでいる。一見して、正反対の雰囲気を感じさせるお二人が、どうして一緒に仕事をすることになったのか、そして「up Tsukuba」ではどのようなことをしているのか。この日は、入れ代わり立ち代わりで、お二人にお話を伺った。ちなみに、取材後に江本さんがお手製のホットケーキを振る舞ってくれた。ごちそうさまでした。

場所は語るものではなく、語られるものかなって。

――堀下くん、最近の話を教えてください。

今、動いてるプロジェクトとして「waya（札幌にあるゲストハウス）」のメンバーと場づくりのオンラインサロンをやろうとしてる。サロンを開くタイミングはかれこれ1年くらいずっと話し合っていたんだけど、あえて今がいい時期だと思ったんだよね。名前は「つくるサロン」。まさに場づくりの先行事例的な動きをしている人たちを何人か招待して、一緒につくっていきたいと思っていて。だから、藤本くんの場づくりの実践者たちを集めようというこの話ともリンクさせられないかなと思ってた。今「waya」は拠点をどんどん増やしているんだけど、場づくりと地域をどう考えてるかということを一緒に紐解いていけたら面白いなと思ってる。ただ、オンラインサロンは個人的に得意じゃなかった。発信は好きだけど情報が溜まってるっていう状態が得意じゃなかった。

――どういうこと？

染み付いちゃってるよね。SNSって発信するものであって、受信するものじゃないっていう感覚があるな。

――受信は対面がいいということだね。

そうだね。SNSに載っていることをしっかりは見ていないかな。

――「Tsukuba Place Lab（ラボ）」は、最初どういう経緯ではじめたの？

構想が生まれたのは2016年5月。CAMPFIREが全国にローカライズしていくタイミングで、知り合いがCAMPFIRE × Tsukubaを立ち上げたんだよね。7月1日にCAMPFIRE × Tsukubaがローンチされると同時にそこに合わせる感じでクラウドファンディングを起案しないかという相談を受けて、じゃあなんかやりましょうということで5月から構想をはじめたのが最初かな。

——クラウドファンディングがきっかけだった。場所はどうやって探したの？

頑張った（笑）。ほんとに頑張って探した、それだけ。5月末には場所はもう決まった。場所がないとできないっていうのはずっと思ってたから、いい場所に巡り合えたっていうのは大きいね。もう少し遡ると、そのちょうど1年前に6年次4年として2年ぶりに大学に復学してるんだよね。2年休学していて。2013年から2015年までは京都にいて。つくばに帰ってきたとき、ゲストハウスをやりたいなと思ったんだよね。いろいろと物件を探したり、コンセプトを固めたりしてたんだけど、いい物件がなくて動いてなかった。

——最初はゲストハウスだったんだ。

改めて、なんでゲストハウスやりたいの？って考えた時に、別に宿泊業をやりたいわけじゃなくて。ゲストハウスのリビングをつくりたかったんだよね。非日常なメンバーが日常を送っているのが好きで。コワーキングスペースならそれができるかなと。結果としてその当時は着手はしなかったんだけど、構想として浮かんでたから、短い期間でラボの構想が決まった。だからあれはコワーキングスペースじゃなくてリビング。名前はコワーキングって掲げてるけど、イベントスペースの方が近いかな。

——リビングが好きな理由ってあるの？

幼少期にある。両親が若く、父親は高卒で母親は短大卒。そんなに裕福な家ではなかったはず。父親はずっと仕事をして、母親は専業主婦として自分を育ててくれた。兄弟もいなくて転勤族だったから身近に同世代の友達がいなくて。さみしかったわけじゃないんだけど、常に周りに人がいる状況を望んでたんだと思う。それが今に影響を与えている。

——それを自覚したのはいつぐらい？

大学に入ってからくらいかな。ずっと年上の男性が苦手だったんだけど、振り返ってみると、幼少期に年上の男性と接したことがほとんどなかった。父親ともそんなに遊んでなかったと思うし、兄弟もいないしみたいな環境で育ったから。大学に入ってもそうで。

——場をつくるうえで大事にしてることは？

すべての人に開かれた場でありたかった。排除をしたくなかった。来るものは受け止めるみたいな感覚だったかなあ、今でもそうだけど。

――それはやる前から思ってたの？

思ってたね。なにかを否定するのが嫌なんだよね。なんでもいいじゃんって言っていたい。

――それは自分もそういう風に扱われたから？それとも逆？

逆かな。強烈に今に影響を受けてるできごとが小２のときにあって。画板を買った。絵を描くやつ。青と赤があって、担任の先生に好きな色を選んでいいよって言われたから赤を選んだ。当時、時代を考えると当たり前なんだけど、男の子はみんな青で、女の子はみんな赤みたいな。男の子では自分だけが赤だった。担任の先生が「間違えたんでしょ？まだ今なら変えてあげるよ」って言われたその一言が強烈で、今でも先生の顔やその状況を覚えてる。トラウマみたいなものなのかな。いや、好きにしていいって言ったやん、みたいな。大人に裏切られたというか、人に裏切られたって思ったんだよね。それ以降、他者を否定することをなるべくしたくないなと思っている。こっちの判断でいいか悪いか決めたくはないなって。

――なるほど。

法に触れなければ、一旦は受け止めたい。嫌いなものであっても、それはぼくが嫌いなだけであって、それでハッピーになる人がいるのであればまったく問題ないし、イベントも開催していい場でありたいっていうのはあるかな。

――異質なものに対しての開かれ度合い、結構あるんだね。

表現が正しいかわからないけど、個人には興味がないんだよね。だから、誰が来ようが関係ない。それは性格とも関係するんだけど、自分はあんまり友達が多くないと思っているし、言葉にするのは怖いけど友達あんまりいらないと思ってるんだよね。でも、今一緒に楽しく過ごせている人たちは友達だとも思ってるし、仕事を一緒にしてる人は好きなんだよね。でも、友達だからっていう考えがぼくの中で希薄だから、誰が来ようとフラットでオープンみたいなところが強くある。相方である江本は一人ひとりを大切にするし、〝わたしの友達〟という感じが強いんだよね。その感覚を自分は持ち合わせていない。嫌いなタイプが来ても大丈夫。ラボでは国会議員の先生の講演会、地下アイドルのダンスイベント、ネットワークビジネスの説明会、AV女優が来ようが、誰でもオッケー。すべてをまるっと受け止めたいとは思ってないけど、外したくないとは思ってるかも。

――感情の揺れが少ないってわけではないやんね？

ベースとして感情の起伏は

めちゃくちゃ激しい。でも、場に人を招くという感覚では誰が来ても同じかも。好きな人が来て、めっちゃはしゃぐみたいなのはない。楽しいんだけど。

——言い方はわからないけど、人は場が構成されるひとつのピースみたいな？

その人が中心にいない。全体の中でのその人っていう見方をしてるかな。江本に「人が好きって表現してるけど、別に人には興味ないよね。場の調和とかを見てるよね」って言われて、なるほどと思った。すごくしっくりきた。だから今、藤本くん単体は見てない。「up Tsukuba」の中にいる一員としての藤本くんみたいな。うん、確かに個人は見てない（笑）。

——そういう言葉を使うとなんか怖い人みたいに思えるけど（笑）、バランスがいいんだろうね。

その点では、江本は面白い。めちゃくちゃぶつかるし、ほんとに正反対。でも、お互いにないものをそれぞれが持っている。分かってはいたけど、オープン以降それをまざまざと見せつけられたというか。

——自分が思う強みはある？

場を俯瞰して見るというのはひとつあるけど、ノッている時の爆発力はあるかなあ。自分は躁鬱の気があると思っていて、外部要因とは別で周期的に沈む時と上がる時があるんだよね。だいたい1ヶ月半に1回くらい沈んでる。

——沈むってどのくらい？

死にたいとは思わないけど純粋になにもしたくない。仕事の連絡も返したくなくなるし、重要って分かっていてもなにもできなくなる。したくなくなるっていうよりはなにもできなくなるの方が正しいかな。

——期間的には？

昔は1週間くらいきてた。今は3日くらい。自傷行為とかはしないけど、生産的なことを止めてしまう。大学生の時はそれがほんとに嫌だったけど、今はその分爆発力あるしいいよねとも思ってる。（ここで堀下さんは、用事のため外出され、江本さんに交代。）

——引っ越しして半年経ったくらい？最近どう？

やっと慣れてきたって感じ。でもだいたい半年はかかるかなって思ってた。ボルドーに留学していたときも、東京に来た時も、慣れるのに半年かかった。半年はいつもしんどいなあ。

——どういうところが？

つくばがどうとかなのか、わたしが基本的に半年かかるとかは分かんないんだけど、人間関係が変わらないまま離れるっていうのがしんどかったんよね。例えば、SNSのタイムラインはあまり変わってないんだけど、行けないイベントが増える。「おいでよ！」って誘ってはもらえるし、実は行ける距離なんだけど、往復3千円と2時間かかるみたいな。行けてしまう距離感がしんどい。行けない

ほうが楽。しんどい時ってなにかと比べている時なのかなと自分では思っている。

——なるほど。

今つくばで友達がいないなあとか、てっとり早く秋葉原とか三軒茶屋に行けばいるのになあとか。あと、つくばの楽しそうなお店は車で行かないとたどり着けないとか。東京だとできていた仕事帰りにふらっと立ち寄る、みたいなことができない。郊外の都市って感じ。見えているようで行けないのがしんどかった。まちの解像度を上げるのは、自分でお金をどれくらい落としたかに比例すると思っているんだけど、そういうのが制限されていたのがこの半年だったかなあって。

——でも、最近は変わってきた？

引っ越して免許をとったほうがいいなと思って、10月から教習所に通って。2月に免許が取れそう。教習に行ってる時は、結構つらかった（笑）。関係ないんだけど、教習所の設備ってめっちゃよくって。Wi-Fiがあったりフリーコーヒーがあったり。教習所で記事を書くという興味深い体験とかもできたし、よかった。

——そもそもどうしてつくばに？

ずっと自分のやってきた場づくりがうまく評価されていないというか、伝わっていない感じがしていて。それでずっともやもやしていたんだけど、堀下が認めてくれて。同世代で初めてだったように思う。

——ぼくも認めてますよ（笑）。

ありがとう（笑）。堀下との関わりで、自分のやっていることの再評価ができた感じがしたんよね。それでいろいろ話しているうちに、一緒に仕事をしようかってなった。

——なるほど。最近はつくばにも少しずつ関われるように？

なんとなくつくばのことが分かりはじめてから、いい感じになってきているかな。お正月に尼崎に帰省して、こっちに戻ってくると去年より「up」がにぎやかになっていて。どの時間にも人が絶対にいるのよね。最初は全然いなかったんだけど。人が少ない、会員さんが帰ったら誰もいないとか。人がいないとダメなタイプなので、最初は気が滅入ってたな。だけど、最近は場もメディアもあって、出会った人の活動をメディアでアウトプットできる。記事を見てくれる人がいる。誰かの行動を促せてるんだなあって。コワーキングスペースでも人に貢献できるし、つくば経済新聞でも情報を出して貢献できているし。

——「up Tsukuba」自体はどう変わってきている？

最近ドロップインが増えているかな。一日2、3件はある。ドロップインと会員さんは全然違うなあと思ってい

て、会員さんは「up」に差し出すものがあるというか。「おすそ分けです」とか「こういう企画がしたい」とか、差し出す気持ちがある人が多い。それがすごくうれしい。だからといって、みんな会員さんになってほしいわけではない。その辺がグラデーション。それでいいと思っている。コワーキング面白いなあって、この2週間くらいで思えてる（笑）。

——友達とか知り合いはどうやって増えていったん？

「友達がほしいんです！」って言うようにしてた（笑）。でも友達ってつくるものではなく、なるものだから、選んでるわけじゃなくて。自然に「鍋しましょうよ」とか言える人がだんだん増えてきたって感じ。自分が閉じてるんじゃなくて、自分から開かれていく。1月は毎週自宅で鍋パーティーをしていた。パーソナルスペースに人を呼んで鍋をするってめっちゃ面白いと思って。で、話がそれるけど家でさわぐのをいい感じに静かにする方法を見つけまして（笑）。電気を消してろうそくをつけてしゃべる、すると人はそっとしゃべりはじめる（笑）。人を招く余裕ができたって感じ。

——友達は「up Tsukuba」関係の人が多い？

出入りしてくれてる人はいるけど、会員さんは会員さんという感じ。仲の良い人もいるけどね。企業の研究者の人なんだけど「『up』を研究者

同士の交流の場にしたい」って言ってくれて。他の研究所の人を呼んで、交流会をしたりね。その人の課外活動も遊びに行ったりして、今は「up」以外の場所にもつながりが広がっているから、面白いなあと思ってる。

——広がると楽しいよね。

東京から近いので、以前に勤めていた「co-ba ikebukuro」の会員さんも来てくれた。「co-ba」でつくってきた人間関係が続いていて、今までとこれからが混ざって。こんなこともあるんだと思った。「シーナと一平（江本さんが以前働いていた豊島区にあるゲストハウス）」と「co-ba」は物理的に近いし、関係者も交わってるから行き来はあるけど、それとはまた違った感じ。より離れたとこで交わってる。今の私のことも知ってくれて「これからも一緒にできるよね」って。すごくうれしかった。つくばが東京に近くて、よかったと思った。

——最初、人が来ない時はなにを？

集中して記事を書いてた。なんでこんなモヤモヤしてるんだろうな、みたいなことを点検する時間。「co-ba」の時は、アウトプットの仕方を知らなかった。今は発信ができるから今のこの状態を考えようみたいな。朝7時から修行僧みたいにパソコンの前に座ってた。人がいるほうが好きだなとその時に思って。環境が変わるとギャップが生まれるからそこから考えること

が増える。今思えばいい時間だったけど、その時はさみしいな、どうしたら人が来るかなとか思ってた。やっぱり場は人がいてなんぼだと思う。本のない本屋さんは意味がないとか思ってたな。

——少し戻るんやけど、会員さんが「差し出す」ようになるのはなにか理由があるんかな？

あんまり計算とかはしてない。単純に話して、コミュニケーションを取り、自分のことも話す。集中したそうだな、と思うときは関わらないようにしている。今後、ぼちぼち会員さんだけを集めて、「up」をどうするか考える会員会議をスタートさせたいなと思ってる。

——自分のことを話すってことも大事なんかな。

会員さんとは、過ごす時間が長いから自然にコミュニケーションが積み重なる。時間とか回数に比例すると思ってる。メソッド的には考えてない。

——なるほど。今「up Tsukuba」はどんな場所なんやろう？

スタートアップの生まれる場所は、来た人によって変わっていくと思っていて。使っていく人によって変わっていく。個人事業を立ち上げましたとかでも全然いいんだけど、個人の会員さんが増えたらいいなとは思っていて。個人っていうかデイリーユースだね、毎日出入りする人。「up」にあるいろんなものを

自由に使いやすくしたほうがいいんだろうなあ。全部オープンなスペースだから。でも、バックヤードを区切られていないとしんどいなとは思う。全部オープンだとスタッフが隠れる場所がないから。例えば、見られながら料理するのは嫌だと思うしね。隠してあげるというのは大事。今はちょっと物理的な逃げ場が少ないかな。

——毎日何人くらい来られるん？

1日10人くらいかな。最近面白いのは、近くに弁護士事務所があるんだけど、そこの弁護士の先生がラヂオつくばの社長さんでたまたまバイトを探していて。で、ラジオ好きだからわたしがやります！って言ったの。やっていてディレクターが圧倒的に不足しているのを知り、学生を紹介するっていうのを個人的にやってる。弁護士の先生がシフト相談に「up」に来るのが面白いなあって思ってる。

——大学生も結構来る？

学生はあえてじゃないと来ない場所。ミーティングに使ってもらうとか。「Tsukuba Place Lab」のスタッフは自由に使ってもらえる。たまにわたしを訪ねて遊びに来てくれたり。基本的に大学生はあんまり来ないかな。

——できてもうすぐ4ヶ月かな。ほかの施設やまちとの関わりは？

市民活動センターや活性化協議会、ラジオなどにインタ

ビューをしたら裏話は結構面白いなあって。今月いいイベントないですかね、とか聞きに行ったり。朝の7時から10時はワンコインでコーヒー付きだからお得なんだけど、図書館の職員さんがドロップインで来てくれていたりとか。シフトがずれた時の時間つぶしみたいな感じで。一緒になにかできたらいいですねって言ってる。わたしたちのクラウドファンディングで知ってくれたそうで。駐車場の管理などをしている都市交通センターの人たちも遊びに来ている。裏のショッピングモールの一角が都市交通センターのもの。いろんな情報が持ち込まれるようになっているなと思う。

――「up」を使ったイベントで印象に残っているものはある？

「100人カイギ」かな。それは参加者としても面白いなと思った。元々いた豊島区で「としま会議」というトークイベントに関わってたから、まちの人をフィーチャーするイベントの型は見てきていて。つくばでもできるんだなあって思った。そのエリアで活躍している人を5人集めて、100人集まったら終わります、みたいなフォーマットを先にやっている地域からお借りしてやっている。

――5人の話を聞くんや。結構多いね。

そう。3時間くらいかな。登壇者同士でプロジェクトが生まれることも一つのテーマになっていて。そういう場として「up」が使われたらいいなとは思った。1回目のイベントでは自分も話した。奇跡的に登壇者全員顔見知りで。あとから仲良くできたらいいなって思ってた。このイベントは大事にしたいなと。この前のイベントのゲストは、15歳の女子起業家や学生寮の銭湯の運営を一人で頑張ってる大学院生とか。いろんな人を知る時間が増えてきたから、よりつくばも「up」も面白くなってきた。

――堀下くんとの役割分担ってどうしている？

こうしましょうと決めたわけではないけど、明確にある。行政関係のやりとりなどはすべて堀下。つくば経済新聞や「up」、インタビューを受けるのや東京から人を連れてくるなどはわたし。

――人や場との関わり方がそれぞれ違うように思っていて。その辺は意識してる？

なんとなくある。立ち上げるのは堀下、育てていくのは江本。そんな感じかな。つくば経済新聞の話を持ってきたのは堀下で。過去にあったんだけど、動いていなくて。それを復活させませんかというのをNPO法人グリーンバードの関係者の方に言われてはじまった。自分から「やりたいんです！」とは言ってないかな。「やるんだね。うん分かった。やります」って感じ。いつもわたしはそんな感じかな。

――そういう感じよね（笑）。

自分でいろいろと見出す感じ。それでもたまにイラッとするけどね（笑）。「面白いからやってよ！」って言うわりに、面白さを教えてくれない人が多い（笑）。やります！って言ったけど、自分で楽しみ方を見つけないといけないわけ？みたいなのは、つくばに顕著だった。まあ、好きになるには自分で手足を動かすしかないよなとは思うんだけど。

——それはいい話なのか（笑）。

いい話やろ（笑）！まあ、まちにとってはいいと思って。自分は、勝手に好きになるように動くから。好きにならないと自分がしんどいのは分かってるからね。でもそれってどうなん？って思ったりもする。

——移ってきて半年。今までやってきての難しさは？

堀下がつくってきたベースの上に自分が乗っかっている感じがするかな。好き勝手できているようでできていないんじゃないか、みたいな。

——なるほど。

あとは、いろんな地方にも共通していると思うけど、同じ視野やレベル感で話せる友人を見つけるまでに時間がかかるとか。

——それは同世代でってこと？

うん。関西ってアクセスが簡単だから、関西という枠組みで捉えることができると思っていて。茨城は公共交通機関での行き来がしにくい。見つけがいがあるのに物理的に行けなかったりする。それが残念だと思って、免許も取ろうと思った。

——その、好き勝手できてるようでできてない感じって、もう少し話してもらっていい？「co-ba」の時とかは感じなかったこと？

ちょっと似てる。雇われているときと感覚が似ているかな。

——それはどうして？

ここはわたしの場所だという思いもある一方で、ある種、勝手につくばを背負ったり、背負わされたりしているような感覚もあって。場所とわたしの線引きみたいなところが、難しいと感じることがある。場所と同化しないって難しいなあって。

——なるほど。

あと「つくばに移住した」と自分が言うのはいいけど、周りから言われるのはあまりうれしくない。プレッシャーをかけられている感じがして。ずっといるんだよね？と言われている感じがする。

——もう少し詳しく聞きたい。

たぶん、出会う人はみんなつくばが好きなんよ。だけど「つくばはいいまちですよ！」って言われて「どこが？」って感じになっちゃうというか。どこにでも面白い人はいるし、見出し方だと思ってる。だからわたしとしては、そういう人にこのまち

でも出会えてうれしいって感じなんだけど、つくばだからとは思えない。

——なるほど。その地域だから、みたいな言い方に引っかかりがある。

どの土地にも等しく価値があると思う。「つくばはいいまちでしょ？」と言われるとしんどいなと。「他と比べていいでしょ！」みたいなプレゼンは全然響かないなって。相対評価を軸にされるのが苦しい。わたしは全国でたくさんの素敵な人に出会った。つくばにも素敵な人がたくさんいるからと言って、つくばが他のまちよりいいという理由にはならない。藤本くんがいるから尼崎が面白いわけじゃない。藤本くんは藤本くんで面白い。そこまで土地と紐づけなくていいんじゃないかとわたしは思う。なぜならいつでも行き来ができる時代になってしまっているから。人は人で考えたいみたいなところはある。

——わたしの場所なのか、預かっている場所なのかっていうとこの違いと今の話は似ているような気もするんやけど。

姿勢としてはあまり変わらないと思う。

——でも、地域と自分とか、場所と自分というのは不可分でもあるよね。

分けることは不可能だと思ってはいる。

——だけど相対評価みたいなものは嫌いだと。ぼくが尼崎面白いよって言ったら、なにかしらの違和感がある？

うーん。それはないなあ。

——どうしてないんだろう？

だから尼崎好きになってよと言わないから。

——なんか見えない願いとかが見えた時にしんどくなる感じ？

この半年しんどかった。それは、好きになれていない自分を罪深く感じたからかな。みんないいまちって言っているけど、わたしはいまいち好きになれないんだよなあみたいなのが嫌だった。でも、自分でつくばに来ることを選んだしな、みたいな。そこに溝があった。

——なるほど。後ろめたさみたいな感じね。

いずれにせよ、前向きに生きたほうが楽しいなと思ってる。

——それはそうやね。

どのまちでもそういう奮闘をするんだと思う。実際につくばは豊かなだなあと思う。筑波山から見下ろす景色とかすごくいい。あとやっぱり気候は大事だなと感じた（笑）。自分に合う気候は大事。身体的に瀬戸内に慣れてるんだなって。自分の中で大事な指標に気づかされたなと思っている。

——「up」の情報発信はなにでやっている？

私はWEB担当。情報発信は、

WEBとFacebookとtwitterがある。あとはnote。大抵の場って、WEBが中身と連動していないことが課題としてあると思っていて。「up」で生まれていることをWEBにもにじみ出させることができないかと考えてる。そんなわけで「up」のひとこと「up word」というものを毎日更新してる。場所もサイトも毎日動いているということを見せ続けることが大切だと思っている。今後は会員さんの紹介ページをつくりたいなと。全部のイベント情報はちゃんと更新してて、ゆくゆくはラヂオつくばやつくば経済新聞もすべてWEBにも紐づけられたら。WEBを一個の作品みたいにしていきたいなと。きちんと溜めていくことができればとは思っている。

――今は2人で運営を？学生とかボランティアを入れないのは意図的なの？

まだ固まっていないから、他の人に入ってもらっても「up」を伝えられないと思ってる。だからスタッフやインターンはまだ入っていない。ゆくゆくは入れたいな。

――会員さん同士や「up」に来てる人たちの横のつながりとか、そこから新しいプロジェクトが生まれていくことについてはどう思ってる？

ここを使い倒してほしいなという思いが最初からある。「『up』から生まれました」というのはうれしいんだけど、自然発生的であればいいなと思ってる。最初、会社勤めだったからかもしれないけど、オフィスからなにかが生まれるということがよくわからない（笑）。仕事が終わった夜とか、切り替えた時間になにか生まれるんじゃないかって。余白の時間にこそなにかが生まれる。今想像しているのは「100人カイギ」のゲストがつながってなにか生まれていくということかな。

――いいね。

わたしはいつも想像するスケールが小さいのかもしれないなって（笑）。なんか「そういえばはじまりは『up』だったね」が一番うれしいかもしれない。

――最後に。「up」が生み出している価値ってなにかな？

ヨガ教室にはじめてチャレンジした先生に「up」を使ってもらった。はじめての機会を提供していることは、価値だと思う。そうした機会を活かすも殺すもその人次第だと思うから、まだ成果は語れないんだけど。でも、場所は語るものではなく、語られるものなのではないかと思ってるから。イベントを何回やったかとか、プロジェクトが立ち上がった件数はいくつかとか、そういう指標は分かりやすいけど。そうではなく、語られることが価値なんじゃないかって。場所が終わるときに、その場にいる人たちにインタビューするというのがいいのかもしれないね。「シーナと一平」で働いていた時も思い出されるためにこの場所はあると思ってて。子どもた

ちが大きくなった時に思い出されたらいいなあ。

——難しいよね。

まちづくりとか、場づくりって評価しにくい。いつもひとつの事例でしかないと思ってる。

名前 **堀下恭平**
生年月日 **1990 年 9 月 12 日**
職業 **株式会社しびっくぱわー 代表取締役／合同会社 for here 共同代表／一般社団法人 筑波フューチャーファンディング - TFF ／グリーンバードつくば リーダー**

筑波大学 2 年次にコミュニティ拠点として学生カフェ創設にかかわったことからまちづくり分野に興味を持ち、下妻市や水戸市、横浜市などの商店街活性化にかかわった後、2 年間京都へ武者修行のため移住。関西を中心に行政計画策定に係るコンサルタントの仕事を始め、のちに起業。全国 50 自治体以上の計画策定支援業務に携わる。つくばに戻り大学生をしながら、2016 年 12 月コワーキングプレイス Tsukuba Place Lab を創業。オープンから 2 年が経ち、企画運営したイベントは 630 本以上、来場者は 12,000 人を突破。2018 年 10 月よりつくば駅前コワーキング up Tsukuba を創業。グリーンバードつくばや筑波フューチャーファンディング - TFF の活動と連動させて地方の価値が高まる仕掛けづくりに挑戦中。「迷ったら全部やる」がモットーで「成功するまで続ければ失敗しない」が信念。

名前 **江本珠理**
生年月日 **1990 年 10 月 31 日**
職業 **合同会社 for here 代表社員／ up Tsukuba おかみ**

兵庫県尼崎市出身 茨城県つくば市在住。東京でゲストハウスの立ち上げやコワーキングスペースの運営に 3 年ほど関わる。2018 年、つくばで起業。同年 10 月つくば駅前コワーキングスペース「up Tsukuba」オープン。「誰もが勝手に居心地がいい」場づくりと「小さくても経済を回す」を掲げ、WEB メディア「つくば経済新聞」の運営やコミュニティ FM「ラヂオつくば」に関わる。